

# ベトナム戦争と婦人国際平和自由連盟アメリカ支部

高 村 宏 子

## 1. はじめに

2015 年、世界最初の女性平和団体といわれる婦人国際平和自由連盟 (以後 WILPF) が結成 100 周年を迎えた。その起源は、第 1 次大戦の開始から 1 年後の 1915 年 4 月に開かれた国際女性会議 (International Congress of Women、以後 ICW) にあった。交戦国、中立国を含む 12 カ国から 1,200 名以上の女性たちが、戦争終結を求めてオランダのハーグに集まった。<sup>1</sup> 参加者の多くは、女性参政権運動に携わる女性たちであった。先進国でも女性参政権が認められていなかったこの時代、参政権と平和は女性たちの中で結びついていて、戦争は男性が引き起こすものなのだから、女性が政治的権利を得て戦争に反対すれば、戦争は起こらないはずだという信念があったからである。女性参政権の獲得こそが戦争のない世界につながると考えられていた。

ハーグでの会議にはアメリカからジェーン・アダムズ (Jane Addams) から 47 名が参加した。<sup>2</sup> アメリカでは、ハーグでの会議以前から女性の間に平和を求める声が高まっていた。同時に、アメリカが中立国として戦争終結のために調停役を果たすことが期待されていた。1915 年 1 月、女性参政権運動と平和運動のリーダーとして知られるキャリー・チャップマン・キャット (Carrie Chapman Catt) とアダムズの呼びかけで女性平和党 (Women's Peace Party、以後 WPP) が結成された。ワシントンの結成大会には約 3,000 人が集まり、綱領を採択した。<sup>3</sup> 主な主張は、早期和平を実現

するための中立国による会議の開催、ミリタリズム反対、平和実現のための青少年教育、外交の民主的管理、政治を人間的なものにするため女性参政権の実現、戦争の経済的要因の排除、国際平和を推進するための男女による委員会の設置などであった。

当時アダムズは、平和主義者、女性参政権の主張者としてアメリカ国内ばかりでなく広く世界に知られていた。アダムズはクエーカー教徒として非暴力と反戦の立場を貫き、講演活動、議会公聴会での証言、著作活動を通じて米西戦争などアメリカが行った戦争行為に反対の立場をとってきた。ヨーロッパに対しても、軍備を背景とする力の均衡ではなく、国際協調主義と軍縮による平和の実現を訴えていた。<sup>4</sup> ハーグでもアダムズに対する期待は大きく、初代会長に選出された。当時はアメリカの参戦前で、アダムズは中立国の代表として信頼されていた。アダムズがハーグで行った「新しい国際秩序」を訴える演説は、会議全体の空気を支配し、ICW、のちのWILPFの基礎となった。<sup>5</sup>

会議の最終日には「われわれ国際会議に集う女性たちは、人間の生命および人類が苦勞して築き上げたものを破壊する、狂気と恐怖に満ちた戦争に抗議する」と、決議案を採択し、恒久平和を実現するため次のように提言した。<sup>6</sup> ①殺戮を直ちに止めて恒久平和のための交渉を開始すること。②外交を民主的に管理すること。③中立国による調停のための会議を要請すること。④住人の承諾のない領土の移譲を禁止すること。⑤女性参政権を実現すること。⑥国際協調と和解のための国際会議を設置すること。⑦恒久平和の原則と条件を研究するための国際会議を招集すること。⑧女性が男性と同等の権利と責任を共有すること。⑨平和を理想とする子どもたちを育てること。⑩戦後の講和に女性が参加すること。

これらの主張は、アメリカのWPPがすでに採択していた党綱領とほぼ一致する。アダムズが会長を務めるWPPがそのままICWのアメリカ支部となることに抵抗がなかったのは当然である。その後ICWは1919年に名称を変え、婦人国際平和自由連盟(Women's International League for Peace

and Freedom / WILPF) となり、アダムズが会長に再選された。こうして WILPF でもアダムズの平和主義が色濃く反映されることになった。

本稿は、WILPF の結成から半世紀、ベトナム戦争への反対が激しくなる 1960 年代に WILPF のアメリカ支部がベトナム戦争に反対してどのような活動をしたか、それらがアメリカの反戦運動のうねりの中でどのような存在であったのか、WILPF 初代会長のジェーン・アダムズの理念が影響していたかどうかについて明らかにする。WILPF の歴史については記録的な内容を含めて先行研究が各種あるが、ベトナム戦争とアメリカ支部の活動とを専門的に扱った論文は見あたらない。本稿では、主にアメリカ支部の月刊機関紙『フォー・ライツ』(*Four Lights*) を利用して、アメリカ支部によるベトナム反戦への取り組みを調べる。

## 2. アダムズの理想と限界

WILPF の基本理念として受け継がれていくアダムズの平和主義とはどのようなものだったのか。アダムズは、軍縮と国際協調主義によって平和を実現することができると確信していた。軍縮を主張する根拠として、軍備増強が戦争の抑止にはつながらないことが第一次大戦の教訓から明らかになったと、アメリカ下院軍事委員会の公聴会で証言している。<sup>7</sup>「軍備による平和ではなく、〔アメリカが〕軍縮および戦争のない時代に向けて世界を導かなければ」ならないと主張し、そのために国際協力が重要であることを強調した。<sup>8</sup>

ただし、こうしたアダムズの考えは 1917 年 4 月にアメリカが大戦に参加する以前に主張されたものである。アメリカ参戦後は、平和主義をやや軌道修正せざるをえなくなる。「戦時における平和主義者の立場はもっとも難しい。宣戦布告前には完全に合法と認められていた主張を捨てなくてはならない」と、述べている。<sup>9</sup> アダムズは、アメリカ政府の食糧増産計画に積極的に協力し始める。戦時下のヨーロッパを悲惨な食糧事情から救うことはアメリカの責任であり、その努力は平和主義と国際協調主義につなが

ると同時に、戦争を不可能にするシステムにもつながると考えた。<sup>10</sup>

しかし、平和主義を掲げながらも実際には戦争に加担することになった場合もあった。政府の食糧増産計画が戦争に利用されていることをアダムズは認識していた。にもかかわらず、「世界に食糧を供給することは、戦争終結後の恒久平和を確実にする大きな要素となる」と述べ、自らを納得させている。<sup>11</sup> 一方、アダムズにとって十分な食糧供給が平和と密接な関係にあったことも事実である。著書『戦時における平和とパン』の冒頭で、「平和とパンは私の心の中で切り離せないものとして結びついていて」と、題名の由来について述べている。<sup>12</sup> その原点は、われわれ人間は「先祖代々、仲間全体がうまくいくよう一人一人が食糧と安全を分かち合って生きてきた」という考えに基づいており、「種族や家父長制の家族が崩壊するのは、〔原始の時代から人類が背負ってきた〕その幸福の本質を失ったことを意味するのだろうか」と、アダムズは嘆いている。<sup>13</sup>

適切な食糧供給によって戦争を抑止できるというアダムズの考えは、WPPが1915年に綱領に掲げた「戦争の経済的要因を排除すること」によって平和を実現するという考え方と共通する。飢餓や食糧の不平等な分配は人間の間に不和や反感を引き起こし、世界を平和と安定とは逆の方向に向かわせることは歴史の例が示している。アダムズは平和をパンと結びつけ、集団の秩序を保つ上で食糧が重要な役割を果たしてきたことを強調した。このことを国際社会に置き換えれば、食糧の公平で安定的な供給によって国際的一体感が生まれれば、結果として争いのない平和な世界を実現できると考えたのである。アダムズは戦争を不可能にする仕組みを生み出すことの重要性を強調し、これがWILPFの基本理念となった。<sup>14</sup> 食糧問題の解決もその一つだったのである。<sup>15</sup> こうして、アダムズの平和主義はWILPFの基本理念として将来に引き継がれることになった。

アダムズは、ハーグでは中立国の立場から、戦争を止めて世界平和を実現するための提言を行った。それらを今日の観点で評価すれば、非現実的で理想主義的な側面があったことは否めない。事実、アメリカが参戦する

と、アダムズは戦争当時国としての立場も意識せざるをえなくなる。アメリカ国内では、兵士が賞賛される一方、平和主義者が「裏切り者とか臆病者」と呼ばれる風潮が平和主義者を悩ませ始めていた。<sup>16</sup> アダムズが会長だった WPP の会員も、アメリカ参戦前の 1917 年 2 月には 2 万 5,000 人に達していたのだが、参戦と同時に会員数が減り、同年末までには 200 名にまで落ち込んだほどである。<sup>17</sup> アダムズ自身も、「自国に対して忠誠」でありたいと考えるようになる。<sup>18</sup> そして、自身は戦争に加担しない平和主義を貫いているつもりであったが、今日から見れば戦争に協力的な部分があったと言わざるを得ない。このあたりにアダムズの平和主義の限界がみえる。

### 3. WILPF の半世紀とアメリカ支部

1965 年、WILPF は結成 50 周年を迎えた。WILPF 結成のきっかけとなった第 1 次大戦から半世紀が過ぎても、ハーグに集まった女性たちが目指した戦争のない世界は実現していなかった。それどころか、第 2 次大戦後は、核戦争の脅威や東西冷戦という新しいタイプの戦争が世界を危険で複雑なものにした。彼女たちが掲げた理想はほとんど達成されないまま、国際社会はより困難な問題に直面していたのである。女性が参政権を得て政治に参加するようになったものの、アダムズらが期待した戦争のない世界は実現しなかった。むしろ、フェミニズムの台頭とともに、軍隊に入隊して男性と同じように戦闘に参加することを求める女性たちも増えた。<sup>19</sup>

WILPF の半世紀は、結成時に掲げた「恒久平和」の実現に向けての活動の歴史であった。<sup>20</sup> 世界中のさまざまな紛争に際し、戦争のない世界の実現を目指すという結成時の理念に基づいて、そのつと積極的に行動してきた。その運動は、平和維持につながる軍縮、難民問題、貧困の解決など国際連盟とも協調をはかりながら進められた。戦間期に WILPF がとくに力を入れて取り組んだテーマは軍縮であった。国際連盟に対して請願運動やロビー活動を展開したり、各国支部の協力によって世界中から署名を集め

たりして、国際連盟の取り組みを支持した。1930年代にファシズムの脅威が増すと、世界中の女性たちが団結してあらゆる種類の暴力に反対することを最優先事項として各国支部に呼びかけた。

第2次大戦後は、新しく誕生した国際連合に深く関わることとなった。とくに核兵器の恐ろしさを訴え、核開発競争や放射能による健康被害について他の平和団体に先駆けて警告した。1950年代には東西冷戦による核戦争の危険が現実視されるなか、WILPFでは核兵器開発と軍拡競争に抗議することが主要な活動となった。また、アジア・アフリカ諸国の独立や自由のための闘いに対しては支援の姿勢を示した。

これらの活動でアメリカ支部はつねに中心的役割を果たしてきた。初代会長のアダムズの掲げた理念を踏襲し、国際連盟や国際連合の活動を支持しつつ、軍縮、戦争の経済的要因を排除するための対策、国際紛争の平和的解決、平和教育として戦争玩具の廃止などを主張してきた。とくに1950年代から60年代にかけては、ベトナムでの戦争がアメリカ支部の主要課題となった。出口の見えない戦争にアメリカ国内が揺れ、民族の自立をめざすアジアの戦いにアメリカはじめ外国勢力が介入している事態に国際的批判が増していたからである。

#### 4. アメリカ支部とベトナム戦争

ベトナム戦争自体についてはここでは詳しく触れない。アメリカがベトナムでの戦争にいつからかかわったかについては解釈が諸説あり、確定は難しい。<sup>21</sup> 多くの戦争がそうであるように、一般の人々が気づくのは戦争がかなり拡大してからである。アメリカ人が政府のベトナム政策を疑問視し始めたのも、1954年のジュネーヴ協定後アメリカが南ベトナム政府を支援し、軍事経済援助を始めたこと、あるいは1965年にアメリカ軍が北ベトナムへの空爆を開始したことがきっかけであった。アメリカ人兵士の戦死者の増加とともに、人々はベトナムでの戦争に反対の声を上げ始めた。

1963年にアメリカ兵の戦死者がはじめて3桁になり、1965年には4桁

になるころから、戦争に反対する声が急に大きくなった。<sup>22</sup> ベトナム政策を批判する声は1954年のジュネーヴ会議のころから一部にはあったが、反戦運動が盛り上がったのはアメリカ軍が本格的介入を始める1964年のトンキン湾事件以後である。戦場に送られる若者の世代を中心に反戦運動は全米に広がり、大学のキャンパスでの討論集会、デモ行進、徴兵カードの焼却、軍用列車の通行妨害などさまざまな形で抗議行動が各地で展開された。

次第で大規模で過激になっていく反戦運動が目立つなか、WILPFの活動はそれほど注目されるものではなかった。しかしWILPFは、アメリカのベトナム介入にもっとも早い段階から注目し、警告を発していた。WILPFの50年史をまとめたキャサリン・フォスター (Catherine Foster) によれば、「第1次大戦の時がそうであったように、WILPFは戦争のかなり初期の段階から他に先駆けて反対の声をあげた数少ないグループの一つ」であった。1963年には東南アジアにおける紛争拡大に反対する運動を始めていた。<sup>23</sup>

じつはもっと早い段階から、WILPFはベトナムを紛争の火種として警戒していた。アメリカ支部の機関紙『フォー・ライツ』(*Four Lights*)の1952年4月号の第1面は、「インドシナ：第2の朝鮮か？」と題して、WILPFの会員で当時カリフォルニア大学バークレー校教授だったジョアン・ボンデュラント (Joan V. Bondurant) による国際情勢の解説記事を掲載した。「ワシントンではアメリカの積極的なインドシナ介入を求める意見が増えている」としたうえで、『ボストン・ヘラルド』紙1952年1月14日付けの記事を紹介し、イギリス、フランス、アメリカの3カ国が中国のインドシナ介入を警戒し、共産主義勢力の侵入があった場合には、アメリカ軍が支援することを約束したと明らかにした。このことに関してボンデュラントは次のように述べている。<sup>24</sup>

インドシナに共産主義が持ち込まれたのはソ連や中国の武力行使に

よるものではなかった。同地で共産主義が発展してきたのは、そこに住む人々の革命的精神の反映である。直面する苦難を払いのける決意である。〔中略〕アメリカの政策は東南アジアにおける共産主義打倒に向けられている。有権者を代表していない、不人気で反動的な政権を、軍事援助によって支持し続けられれば、そこの人々を共産主義者の「解放者」に協力させることになる。

ボンデュラントはさらに続けて、WILPFは直ちに行動を起こすべきだと主張する。理由は、インドシナへの介入がWILPFの基本理念に反するからだという。「われわれWILPFの基本理念は、民族自決を支持すること、軍事的解決に反対することである。これらは1951年の大会ではっきり再確認されている。われわれWILPFは、インドシナでフランス軍を軍事的に支援することには反対である」と主張している。<sup>25</sup> 1950年代はじめ、アメリカがベトナムへの介入を深める以前であったにもかかわらず、示唆に富んだ内容といえる。

このように、インドシナ情勢に対してWILPFアメリカ支部が迅速かつ的確に対処したことは事実である。しかし、各地の地方支部や下部組織がアメリカ軍のベトナムからの撤退を要求する運動を展開するのは、さらに10年後、全米でベトナム反戦運動が盛り上がりを見せた時期であった。1965年3月、WILPFのメンバーで活動家のアリス・ハーズ (Alice Herz) がベトナムでの戦争拡大に抗議して焼身自殺を試みた。この事件が刺激になったという見方もある。<sup>26</sup> 10日後に息をひきとった彼女が残したメモには「戦争に反対して行動せよ」と、アメリカの若者に対する訴えが記されていた。<sup>27</sup> 翌月、学生や平和団体の人々が政府のベトナム政策に抗議するデモ行進をワシントンで行い、2万人以上が参加した。<sup>28</sup>

## 5. アメリカ支部独自の戦術

焼身自殺のような衝撃的ニュースを除けば、WILPFがベトナム反戦運動



で主要なメディアに取り上げられたことはほとんどない。多くの会員たちは、他の反戦グループと連合して各種の抗議活動に参加してはいたのだが、WILPF としての存在感には欠けていた。結成から 50 年がたち、会員の減少や高齢化が問題になっていた。「非難」よりも「説得」に重点を置く WILPF の伝統的戦術ではベトナム問題に迫ることが難しいのではないかと、内部からも批判が起こっていた。<sup>29</sup>

一方、会員のなかには路上で若者が中心となつて行つた反戦運動に抵抗を感じる者もいた。むしろ、アメリカ支部では議員や関係団体宛ての反戦を訴える手紙、ロビー活動、新聞の意見広告などに力を入れ、継続的に取り組まれた。たとえば、機関紙 1964 年 3 月号では「今こそ行動を起こす時である」と呼びかけ、プログラム & アクション委員会が「あなた方にできること」として次のような提案を行つた。①大統領、議員、新聞社宛てに手紙を送る。②ラジオやテレビの視聴者参加番組を利用する。③イースター休暇の間に国会議員を訪問する。今からアポをとろう。④あなた方の支部の会合でベトナム問題をテーマにする。決議文をまとめて、新聞社や地元選出の議員に送る。⑤アクション・ポストカードを印刷して、地元の聖職者やディスカッション・グループに送る。⑥地元紙の編集長に手紙を書く。⑦大統領予備選挙の地元候補にベトナムに関する質問状を送り、その回答を WILPF の見解とともに公表する。⑧「われわれは、自分たちの税金がベトナムでのモラルに反する違法な軍事行動を支えるために利用されることに反対する」と書き、所得税申告書に同封する。⑨集会を開く。<sup>30</sup>

「あなた方にできること」のコーナーは、ほとんど毎号、ベトナム戦争、公民権、フェミニズムなどについて各自の主張をどのように訴えたらよいか、運動の方法が提案されている。1964 年 7 月号のベトナム関連の「あなた方にできること」は、次のように提案している。①他の組織とも協力して、ベトナム戦争反対の署名をしてくれた人から 1 ドルずつもらい、それで地元紙に広告を出しましょう。②メディアにアプローチしましょう。社説、コラム、ラジオ、テレビに対する意見を手紙に書いて送りましょう。

③他の組織と共同で反戦集会をもちましょう。④ベトナムを政治的に解決するよう、地元選出の上院議員や下院議員に働きかけて、発言してもらいましょう。<sup>31</sup>

1965年頃には世界中がベトナムでの戦争に危機感を覚え、平和的な解決に向かうための努力が求められた。WILPFでは、1965年の結成50周年を前に「ベトナム戦争中止への協力をアメリカ女性に求める訴え」を作成して、世界中の女性たちから署名を集める準備を始めていた。オーストラリア支部代表のロレーン・モーズレー (Lorraine Moseley) の指示で世界35カ国から600名の著名な女性たちの署名が集められた。アメリカ支部ではニューヨークで記者会見を開き「訴え」を発表した。さらに、『ニューヨーク・タイムズ』ほか数紙に意見広告として掲載した。<sup>32</sup> この「訴え」は全米の女性団体にも送られ、各地で議論されて多くの人々に理解が広がるように計画されていた。

ここに署名した多くの国の女性たちは知っています。ベトナムの人たちの苦しみを、あなた方の夫たちや息子たち、ベトナムの息子たちや兄弟たちの苦しみを、われわれは知っています。

どんどん拡大する戦争が、ゆくゆくはすべての国の罪のない何百万を巻き込むかもしれないという恐怖をともに共有していることを。

われわれは、あなた方が直面する深刻な悩みに共感を表明したいと思います。現在のベトナム政策によって世界のわれわれに対する尊敬が失われてしまうのではないかと、われわれは恐れています。その世界の尊敬をあなた方の国に取り戻す方法はきっと見つかると、われわれは熱い希望を抱いています。

女性は、成人人口の少なくとも半分を構成しています。民主社会の市民には公共の政策に影響を与える権利と責任があります。だからこそ、あなた方にはベトナムでの戦争を止めさせる力があると信じます。

外国軍隊の撤退に備えて、即時停戦とすべての当事者が参加する迅速な交渉が必要です。どちらの側も受け入れることが出来、ベトナムの人々が自分たちの将来を決めることができるような解決策が見つかることを明らかにする必要があります。それは、全世界の平和に寄与

することを追求したものでなければなりません。〔後略〕

このほか WILPF では、それぞれの会員が地道な運動を継続する戦術によってベトナム反戦を訴えた。その一つに手紙による戦術があった。上下両院の会期の始まりに合わせて、つまり年に2回上院議員と下院議員の一人一人に書簡を送る方法である。たとえば、1966年1月には次のような手紙が各議員に届けられた。「ベトナムでは宣戦布告のない戦争がエスカレートが続いています。人類は、世界的な核戦争の可能性に恐れを感じています。〔中略〕外交政策を改め、『共産主義封じ込め』と中国包囲に基づく政策ではなく、世界の諸問題に積極的にアプローチする政策に転換すべきであると、われわれは信じます。」<sup>33</sup> こうした年2回の議員への定期的な書簡以外にも、アメリカ支部では各方面に手紙を送ることを奨励し、「議員への手紙をバックアップするため、各自がこの手紙に添えて自分の意見を地元出身の議員に送りましょう。この問題をもっと勉強するよう地元議員に働きかけましょう。ここに示した WILPF の観点を地元議員に示しましょう。」と呼びかけた。<sup>34</sup>

機関紙には「あなた方にできること」につづいて、1966年からは「今月の手紙」というコーナーが登場し、WILPF の主張を一定の時期に集中的に発信することが行われていた。たとえば、11月号の「今月の手紙」では、「月に一度は編集者、上院議員、ホワイトハウス、国務省に手紙を出して、ウ・タント国連事務総長の主張を支持し、①北ベトナム爆撃の無条件停止、②南ベトナムにおけるすべての軍事行動の縮小、③戦闘に参加しているすべての者が交渉のテーブルにつくことを訴えよう」と呼びかけた。<sup>35</sup>

さらに、翌1967年1月には「議会と大統領に圧力をかけ続けよう。編集者に戦争の犠牲者のことを訴えよう。42,000人のアメリカ側の死傷者、うち戦死者6,000人以上、さらに数えきれないほどのベトナム人男女、子どもの犠牲者について訴えよう。ナパームやゼリー・ガソリン（人間や動物の肉にくっついて骨までしみ込んで焼く）を使っているのはアメリカ以

外にはないことを」<sup>36</sup>と、具体的な提案が行われている。その結果、フィラデルフィア支部では、新聞 8 紙に意見広告を掲載したり、大統領や上院議員に手紙を出したりして、爆撃の中止を訴える呼びかけが行われたと、報告されている。<sup>37</sup>

このほか、各地の支部ごとにそれぞれ緊急の課題に向けて取り組みが行われていた。カリフォルニア州の支部では、ベトナムでナパーム弾が使用されていることに抗議して、ナパームを製造するダウ・ケミカル社の製品に対する不買運動を呼びかけたり、ダウ・ケミカル社に公開質問状を出したりした。<sup>38</sup> カリフォルニアの港からベトナムに向かうナパームの積み出しに反対して、ナパームを運搬するトラックの前に立ちはだかつて阻止しようとして、WILPF の会員を含む 30 人が逮捕されたこともあった。<sup>39</sup> また、子どもの教育に力を入れてきた WILPF では、おもちゃの子どもへの影響についても関心を払ってきた。とくに戦争玩具を製造しているメーカーやテレビの暴力シーンに抗議したり、「戦争玩具追放キャンペーン」を行ったりする一方、毎年 3 月に開かれるクリスマス用玩具の見本市に向けて、平和志向の玩具の製造をメーカーに働きかけるなどにも努めた。<sup>40</sup>

## 6. おわりに——アダムズの遺産

WILPF アメリカ支部によるベトナム戦争に対する抗議運動は、機関紙での取り扱い状況から判断する限り、1967 年から 68 年あたりをピークにその後は鎮静の方向に向かっている。WILPF の会員の多くが、全米各地の反戦集会やデモ行進に積極的に参加していたことは事実であるが、それらは WILPF の行動として取り上げられることは少なかった。そこで、本稿では WILPF 独自の取り組みに焦点を合わせ、結成以来 50 年を経た WILPF の姿を明らかにした。加えて、彼女たちのベトナム反戦への取り組みに初代会長のアダムズの影響がみられるかどうかを探ることも本稿の目的であった。

結論から言うと、50 年前にアダムズが掲げた理念、ハーグで女性たちが

決議した基本方針が、良い意味でも悪い意味でも、アメリカ支部の活動に生きていたということである。彼女たちの行動は当時の反戦運動の高まりの中では地味でかすんでいるように見える。しかし、彼女たちの行動は WILPF の基本理念に基づいたものであったことがわかる。たとえば、1967 年の機関紙には、新聞の社説に当たる部分で次のように述べられている。

軍縮、国家間の紛争の平和的解決、国際法の仕組みの確立、これらに向けて進歩がない限り、ベトナムは、世界中の際限のない紛争の前触れとなるであろう。〔中略〕われわれにとって建設的な選択肢がある。それは、行動することである。知的で、永続的で、忍耐強く、創造的なアクションである。まず、自己教育から始めよう。役人、議会、編集者、友人に思慮に富んだ手紙をもっと送ることができるはずだ。広告、集会、会議、出版、テレビ、ラジオを利用して、われわれの関心を目に見える形にしなければならない。〔中略〕もっと知的な活動しよう。<sup>41</sup>

翌月の機関紙も、WILPF の活動が「時間のかかる、骨の折れる、ドラマティックとはいえない活動」とであると認め、次のように述べている。<sup>42</sup>「平和と団体とはかく熱い時期に燃え上がって支持者を集めるものの、爆撃の音が静まると衰退してしまう。これでは中途半端である。〔中略〕反戦だけでは不十分なのである。われわれは、プロピース（平和支持）の立場、すなわち平和を可能にする社会環境を築く取り組みを支持する立場なのである。」<sup>43</sup> この考え方こそ、第 1 次大戦に反対して生まれた WILPF の原点だったのである。同時に、アメリカ支部の母体となった WPP が 1915 年に採択した基本方針とも共通する。

1960 年代に激しく燃えたベトナム反戦運動の中で WILPF が果たした役割はどのように評価されるべきか、本稿では十分に検証するにはいたらなかった。中産階級的女性たちによる平和運動にすぎなかったとも言えるかもしれない。彼女たちが大統領はじめ政治家やメディア関係者に送った手紙は膨大な数に上ったことだろう。しかし本稿では、これらがどの程度効

果があったかを示す資料にまでは手が届かなかった。それらは地方支部の記録、手紙に対する返事や反応を調査することによって明らかにされるはずである。今後の課題としたい。

注

1 Mary Jo Deegan, ed., *Women at the Hague: The International Peace Congress of 1915*, N.Y.: Humanity Books, 121.

2 Ibid.

3 Jane Addams, *Peace and Bread in Time of War*, New York: Macmillan Company, 1922, 7.

4 “Address of Miss Addams at Carnegie Hall,” *Survey*, vol. 34 (July 17, 1915) in Jean Bethke Elshtain, ed., *The Jane Addams Reader*, New York: Basic Book, 2001, 336; Jane Addams, “Women and Internationalism,” in Deegan, ed., 107–115.

5 Deegan, ed., 17.

6 Ibid., 123–130.

7 U.S. House, Committee on Military Affairs, *Statement of Miss Jane Addams* (January 13, 1916), 5. 高村宏子「第一次世界大戦とジェンダーに関する一考察：ジェーン・アダムズを中心として」『東洋女子短期大学紀要』第31号（1999年3月）107に引用。

8 Ibid., 14, 高村 107 に引用。

9 Jane Addams, “Patriotism and Pacifists in War Time,” *The City Club of Chicago Bulletin* 10 (June 16, 1917) 184, in Marilyn Fischer and Judy D. Whipps, eds., *Jane Addams' Essays and Speeches* (London and New York: Continuum International Publishing Group, 2005) 153.

10 Daniel Devine, *Jane Addams and the Liberal Tradition*, Madison: State Historical Society of Wisconsin, 1971, 201. 高村 109 に引用。

11 Jane Addams, “World Food and World Politics,” *Proceedings of National Conference of Social Work* (Chicago: Rogers and Hall Co., 1918), 650–656, in Fischer and Whipps, eds., 180.

12 Addams, *Peace and Bread*, vii.

13 Ibid., 205.

14 Gertrude Bussey and Margaret Tims, *Women's International League for Peace and Freedom, 1915–1965: A Record of Fifty Years' Work*, London: George Allen & Unwin, 1965, 8.

15 19世紀後半のヴィクトリア的道德環境で育ったアダムズは、男女の性差を意識し、性別役割分担に基づいて判断する傾向があった。そして、伝統的に女性が担ってきた分野では女性の方がすぐれた能力を発揮できると確信していた。それゆえ、

食糧の生産も女性の領域に属する伝統的な「女性の天職」と考えた。高村、105-107を参照。

16 Addams, *Peace and Bread*, 110.

17 Harriet Hyman Alonso, "Nobel Peace Laureates, Jane Addams and Emily Green Balch," *Journal of Women's History*, 7-2 (Summer 1995), 11-12.

18 Addams, *Peace and Bread*, 110; Jane Addams to Wald, January 25, 1919, qtd. in Allen E. Davis, *American Heroine: The Life and Legend of Jane Addams*, New York: Oxford University Press, 1973, 253. アダムズの自国に対する愛国心の根拠は、アメリカの建国の歴史が示す「正しさ」であった。つまり、アメリカは建国時から偏狭なナショナリズムではなく国際主義を目指していたという認識があった (Addams, "Patriotism and Pacifists in War Time," 155-156.)。

19 第1次大戦中、女性参政権を要求して男性と同様に戦地で任務につくことを希望する女性が増えた。アメリカでは女性がはじめて兵士として軍隊に採用された。ただし、女性兵士の所属は非戦闘員の補助部隊で正規軍ではなかった。女性がアメリカ軍に戦闘員として参加したのは、1991年の湾岸戦争が最初だった。アメリカの女性の軍隊参加の歴史については、以下を参照。Jeane Holm, *Women in the Military: An Unfinished Revolution*, Revised Edition, Navato, Cal.: Presidio Press, 1992; William B. Breuer, *War and American Women: Heroism, Deeds, and Controversy*, Westport, Conn.: Praeger Publishers, 1997.

20 WILPFの半世紀の歴史については、Bussey and Tims. 及び Catherine Foster, *Women for All Seasons: The Story of the Women's International League for Peace and Freedom*, Athens, Georgia: University of Georgia Press, 1989を参照。

21 アメリカのベトナムへの介入がいつ始まったかについては、次を参照。白井洋子『ベトナム戦争のアメリカ：もう一つのアメリカ史』（刀水書房、2006）、3-13頁。

22 "Statistical Information about Fatal Casualties of the Vietnam War." <<http://www.archives.gov/research/military/vietnam-war/casualty-statistics.html>>

23 Foster, 8.

24 *Four Lights*, April, 1952.

25 Ibid.

26 Foster, 31.

27 Ibid.

28 *Four Lights*, May, 1965.

29 Foster, 43.

30 *Four Lights*, March, 1964.

31 Ibid., July, 1964.

32 Foster, 8-9; *Four Lights*, May, 1965.

33 *Four Lights*, January, 1966.

34 Ibid.

35 Ibid.

36 Ibid., January, 1967.

37 Ibid.

38 Ibid., February, 1967.

39 Ibid., October, 1966.

40 Ibid., February, 1967.

41 Ibid.

42 Ibid., March, 1967.

43 Ibid.